

アシール(サウジアラビア南部)現地調査私的記録

— 3つの最も困難であった現地調査を中心に：—

- ① ルブ・アルハーリー砂漠現地調査
- ② スーク・アイバーン山岳地帯現地調査
- ③ 大ワーディー廻行徒歩現地調査

— 当時の日記よりの抜粋 —

本田 孝一

① ルブ・アルハーリー砂漠現地調査 (ナジュラン・ベースキャンプにて)

1975年12月5日 (ナジュラン・ベースキャンプにて)

明日に控えたルブ・アルハーリー行きのため今日は一日中走り廻らねばならなかった。

ナジュランのアミール（県知事）のところに行ってガイドとドライバーを出してもらおう交渉とその人選に時間がかかってしまった。そのため皆がやっていた荷物の積み込み等の準備作業を手伝うことができなかった。申し訳ない。

しかし一番心配だったイマーラ（県庁）からの斡旋のガイドを2名、大型トラック運転手を1名確保することができ、連れて帰ることができた。これで一安心。オマル氏とアミールの家に直接行って、直談判して出してもらったのである。ナジュランのアミールはまだ若い精悍そうな顔立ちであった。

キャンプに帰って、2名のガイドを交えて綿密な打ち合わせをした。シャローラに行くには道が3つあること、今回は上の道を通ることがよいこと、なぜならばその道は一番時間がかかるけれども容易なこと、そしてシャローラには水もガソリンも手に入ることなどいろいろ貴重な情報をガイドから知らされた。ようやく現地調査の大筋が掴めてきたようだ。

私はその夜、11月分の現調成果納品のために一人で3時ごろまで成果のチェックやテープの編集、書類作成で眠ることができなかった。

しかし明日があるので徹夜せずに3時間ほど眠った。

1975年12月6日

いよいよ、ルブ・アルハーリー現地調査。前日までにすでに準備完了。ガ

イドもドライバーもそろってナジュランのベースキャンプを出発した。サロン車2台、13トンのメルセデス・ベンツのローリー、それに8000リットルの水を満載したメルセデス・ベンツの水タンク車、そしてピックアップ1台。

人員は、大脇氏、祖父江氏、岩松氏、山村氏、オマル氏、そして私。そしてコックのアップース、ボーイのルゼイク、それにナジュランのイマーラから出してもらったガイド兼運転手の3名、合計11名。

私たちはまずワーディー・ナジュランに沿って進んだ。私は先頭のサロンに岩松氏の通訳という形で乗り込んだ。岩松氏は、西都隊長も第一に推薦している有能な現調者。彼は車の進行に合わせ、あくまでも冷静に現在位置を確認していく。私はコンパスを睨みながら車の進行方向の変化と走行距離を5分おきに岩松氏に報告していった。彼はそれにうなずきながら、通ってきた道筋を確実に赤鉛筆で現調写真上に描いていく。

キャンプから出発して1時間も走らないうちにローリーと水タンク車が砂漠の手前でスタックしてしまった。私たちは角材をタイヤの下に敷いて脱出作業を試みる。これはすぐ成功したが、先の前途が思いやられた。

しかしこの後は、どうにか5台とも進むことができた。今日は140キロほど行ったことになる。しかし砂漠の中で日が暮れたため、そこで野宿。

1975年12月7日

朝は未明に目をあけた。星がぼつと鈍く光り、空はミルクを流したように霞んでいる。寒い。さすが砂漠の夜は冷えた。

昨夜はみなでベッドを並べて眠った。あまり寒いのでテントの幕を車に立てかけて風を防いだりした。

出発：7：30．1時間も走るとモンホリーという地名の砂漠の中の警備隊の建物に到着した。

あたりは全く地平線から反対側の地平線まで砂の世界。砂はうねり、流れ、盛り上がり、また刃物のように鋭く、またふんわりとさまざまな姿で私たちの視界に突然現われる。よく見ると砂丘の列が平行に長く何本も走っている。それらは南西より北東の一定方向にあくまでも続き、一本一本が2、3キロくらいの間隔で規則的に平行に並んでいる。

私たちの車のドライバー兼ガイドの名はドヘイル。彼は一時もスピードを落とすことなく猛烈な勢いで車を操縦し、他の車を尻目に常に先頭を走りつづけた。車はすごい轟音を立てながら進むが、小気味よい。ドヘイルは、よく観察してみると砂丘の斜面の硬いところを探しながら、ハンドルを巧みに小刻みに動か

している。車は雪上を滑るがごとく進み、何だかジェットコースターに乗っている感覚。

後続のローリーと水タンクは幾度も私たちの車についてくることができなかった。いつの間にか遅れ、時として砂丘の裏に消え、また時として姿を現し、我々をやきもきさせた。遠く離れてしまうと、ただレンガ色の砂の海の中でうごめく小さな虫のようにしか見えなかった。

でも今日は、1日の予定の行程を順調にこなした。150キロほど進んだことになる。今日はアブー・シダードという名の砂丘の先まで達することができた。アブー・シダードとは「ラクダの鞍の父」という意味、なるほど砂丘の稜線の形がラクダの鞍のように見える。

1975年12月8日

アブー・シダードの先の砂丘のふもとにテントを張った。そこに水タンク車を残すためである。これから先は、水タンク車は重すぎて走行不可能であると皆で判断し、決めたのである。そこには山村氏とルゼイクに留守番として残ってもらうことにした。山村さんにはせっかくルブ・アルハーリー砂漠の現調チームの1員に選ばれていながら、途中でこのような形で留守番をしてもらうなんて本当に申し訳ないと思った。2人ともやさしい心持ち主であるだけに、不平一つ言わずその役に従ったことはなおさら心苦しい。私たちは1週間くらいしたら戻るからと2人に言った。いい加減なものだ。でもこれからのシャローでの現調で何日かかるかわからないのだ。私達は2人分の食料と食料がなくなった時のために2頭の羊を残した。水についてはタンク車一杯分あるので心配ない。

出発：朝7時半。パーティーはサロン車2台とメルセデスのローリーの3台だけになった。ピックアップも2人の足として残した。

前方には長い砂丘の列が規則正しく北東に走っている。車は2つの砂丘列の間の「シュッガ」と呼ばれる平らな地面を走った。

砂丘は風の当たる側は滑らかで、硬かったが、反対側は砂丘特有の急斜面になっていて柔らかく、異様にくねり、切り立っていた。砂丘の景色は、単調そのもの、肌色一色。よく見ると風の動きに従って揺らめき、さまざまな起伏を作りだし、それらはまるで脳のひだのように艶めかしく、まるで生きているよう。車はひたすら両側に砂山の高壁を見ながら、シュッガを轟々と何キロも進んで行った。しかしそこから出るための場所を見つけなければならない。そのまま行ったらただ北東に進むだけで、目的地に着くことはできないからだ。しかし高壁はいつまでもそそり立ちどこが出口か皆目分らない。しかしドライバー

のドヘイルはその高壁が切れるところをはっきり知っていた。この時ほど彼を頼りに思ったことはない。出口はそこだけが低くなっていて容易に通り返れることができる。しかしまたもう一つの砂の高壁が現れ、次のシュッガを進んでいかねばならなかった。今日はこれの繰り返しだった。

ローリーは前輪駆動がないので力が足りず、今日一日だけでも6回もスタックした。後輪はレンガ色の砂の中に半分も埋まり、その都度総勢で、角材を車輪の下に敷き、前進したり後退させたりして脱出させなければならなかった。

1975年12月9日

ウルーク（砂丘）の中で泊まった。砂枕の一夜。風もなくぐっすり眠れた。朝6時頃起き、辺りを歩いた。ゆったりとした砂の起伏を辿りながら砂の上にひっそり生えている草を見つけた。こんなところにも十字架弁の小さな黄色の花を茎の先端につけた草が。草は風に根がそぎ取られるほど揺れてみな一方向に傾いている。試しに草を抜こうとしたが、根は砂の深くまで食い込んで抜けない。

砂は肌色であくまでも細かく、手で掬うと掌からさらさらこぼれ落ちた。

シャローラには2時間弱で到着した。ウルークを越えて遠くに黒い地面が広がっている。ここがシャローラか。軍人のテントだろうか、日に光って見える。シャローラは大きな集落だった。もちろん軍の基地だとは聞いていたが、それ以上に周りに泥の家々が並んでおりふつうの町の形をなしていた。私たちが入っていくと、カーキ色の軍服を着た軍人や子供たちが一斉に出てきて、私たちを珍しそうに見送った。泥の民家の間にガソリンスタンドや店がみえる。

さらに大きな井戸もあった。そこでは軍人たちが水タンク車を横付けにして水を汲んでいた。私たちは安心した。

シャローラはルブ・アルハーリー砂漠の中にぽっかり浮かんだ陸の孤島のような。でも通りは人が往来し、サウジの他の町と変わらない。私たちは缶詰をたくさん並べた薄暗い店の前に車を止め、ジュースを飲んで一息ついた。

1975年12月10日

今日はシャローラより50キロほど南にあるオデーアというところまでの現調。驚くことにアミールが直々にガイドとして私たちに同行してくれた。

アミールについては、私たちは昨日その役所に表敬訪問していた。彼は私たちの仕事をよく分かってくれ、明日は自ら私たちに同行したいと申し出てくれた

のである。さらに昼は羊をつぶして私たちにご馳走をふるまいたいとさえいいだした。私たちはその申し出に有り難いとは思うものの、日程が詰まっており、アミールと一緒にこちらのペースで仕事ができないのではないかといぶかった。でも郷に入っては郷に従え。アミールの好意に従うほかない。

アミールは GMC の車を自ら運転し、彼の息子たち4人を乗せ、荷台に羊や食料を積んで私たちに随行した。

アミールは髭が濃く、でっぷりとし、いかにも戦争の勇士といったプロフィール。息子たちも精悍な顔立ちで、みな腰に銃帯を締めていた。2人の息子は荷台に立ってかん高い声でベドウィンの歌を歌っている。時々 GMC を運転している運転席のアミールの父親に、前方の砂丘の通りやすい部分を指し示しながら「右、左」と声をかけてガイドの役を果たしていた。

今日は、この GMC と私たちのサロン車2台とで10以上のウルク（砂山）を横切ったことになる。

砂山群はほぼ等間隔で、平行に北東の方角に並んでいる。砂山の標高はそれ程高いものではなく、平均して5メートルから10メートルくらいの高さだが、砂はやわらかい。車はところどころでどっと砂の中にのめりこみ、止まってしまう。そのような場合、私たちは車をあきらめ、自らの足で砂の山に登った。しかし実際に登り始めてみると、砂は予想以上に柔らかく足がめり込み、砂山は見上げるばかりに高く、切り立っている。私たちは足をとられ喘ぎながらも、ようやく尾根に立った。遠くを見ると、今我々が砂の海の中の一つの波に乗っていることを実感する。

日がもう傾いてきたのか、一列に並んだ私たちの影が砂上に長く伸びていた。今日はアミールのおかげもあって1シートを完了することができた。

1975年12月11日

今日も幾つの砂丘の列を上って、横切っただろうか。シャローラの西に進み、その後北上し、砂列に沿ってシャローラに帰ってきた。

トヨタのサロンは強く、ほとんどの砂丘を楽々と乗り越えていく。しかし急な斜面に気がつかず上がった時など、ドスンと車の中央部を砂で埋められてしまい、いわゆる「亀の子」状態になることもしばしば。そんな場合は皆でつかえた部分の砂をスコップや手でかき出さなければならなかった。

砂は肌色で、柔らかい曲線と稜線の鋭さは魅惑的。

ところどころに動物の古い骨が転がっている。その骨の白さは砂の色と対照的に際立っていた。無常な光景なのに、哀れはあまり感じない。

私は顔中砂だらけになって車の下に入って砂をかき出した。見上げると砂丘の

稜線では風がたえずひゅうひゅうと砂の粉を雪のように吹き飛ばしている。
今日でシャローラ地区の現調が完了したのだ。
私は明日のためにジャリカンからガソリンを車に補給しながら、じりじりと焼き付ける日差しの中で遠い砂丘の列を眺めていた。

1975年12月12日

現地人たちは、今日が犠牲祭（イスラム教の大祭）の日だということで朝早くシャローラ市内に出かけて行ってしまった。
私たちは、彼らが帰ってきてから移動することにした。
午後山村氏とスゼイクが留守をしている地点を目指して出発した。
しかし残念。今日は2人のいるところに着くことができなかった。途中で野宿。
ローリーが幾度もスタックして思うように進めなかったからだ。私たちはその都度サロンから降りて、砂をかき出した。
山村さんとルゼイクはさぞかし心配していることだろう。2人に申し訳ない。
2人は無事だろうか。夕日に光る砂がけむりとなって、地上を這い、綿のように舞い上がっていた。

1975年12月13日

昨日はスタックに明け暮れて、とうとうシュッガの途中で野営せざるを得なかった。それにしてもローリーはやっかいものだ。ローリーはウルーク(砂山)を越える度に車輪をとられ、砂を吹き上げてしまう。車輪は空回りし、その結果かえって砂を掘って深く埋まってしまう。私たちはすぐにスコップをもって車輪の周りの砂をかき出し、角材を敷き、車を動かす。しかし砂は柔らかく1回で脱出することはほとんどできない。角材は砂の下にもぐって沈んでしまう。私たちは再度同じことをやらねばならなかった。

私たちは午前11時頃、山村さんとルゼイクのいるテントを見つけた。遠くから砂の海の地平線に小さな茶色のテントと水タンク車が見えたときは、みな歓声を上げた。豆粒ほどの小ささであったがはっきり見える。山村さんもルゼイクも見えた。山村さんは、何と水タンク車の上に乗って映写機を回して、我々が到着したのを撮影していた。毎日我々が帰って来るのを待って水タンク車の上に上って地平線を見ていたのだろうか。2人は変わった様子もなく元気そうだった。山村さんのところに置いておいた羊は殺されていなかった。2頭とも元気だった。

これでようやく、ルブ・アルハーリーの現調も半分くらい終わったことになる。

1975年12月14日

はじめに行ったモンホリーに向け出発した。途中、水タンク車が2回スタックするだけでスムーズに行程を進むことができた。モンホリー着12:00。午後より現調を始める。我々は、写真上に写っている砂漠の中にある頭の黒い山とおぼしき地物を目指して行ったが途中いくつものシュッガを乗り越えていかなければならなかった。シュッガにはそれぞれ名前がついていた。

私は50万分の1の地図をたよりに自分たちの現在地を確かめるべく一つ一つ砂丘をチェックしていった。しかしちょっと気を抜いて他のことを考えたりしようものならたちどころに現在位置を見失ってしまう。一端見失ってから再度探すのは至難の業。お手上げに近い。

その点私の前にいる岩松氏はさすがにプロだ。スケールをいつも地図に当て、車の四方を常に目をくぼり、地図上に進んできたコースを赤線で正確に記入している。私は残念ながら彼にはかなわない。途中で2、3回居る場所を見失ってしまったのだ。その都度地図上に彼が書き込んでいる赤線のコースを見させてもらい事なきを得た。もし私一人でこんな砂の海の中で刻々と変える車の位置を割りださなければならなかったらと思うと背筋が寒くなった。

現調を終え、夕方キャンプに戻った。道々、斜陽は動物の内臓のようになめらかな砂丘の起伏にさまざまな明暗を作りだしていた。

キャンプでは羊のご飯をたらふく食べ、皆8時には眠ってしまったようだ。

1975年12月15日

砂漠にもいろいろの生き物が生きている。

例えば動物では、きつね、ねずみなんか砂の地面に巣穴を作っていて、私たちにも簡単に見つけることができた。今回もルブ・アルハーリーに来る途中できつねの穴を見つけ、それを崩していたら突然ぱっと灰色のきつねが飛び出し、砂山の方へ逃げていった。私たちはサロンで追いかけたが、残念。きつねは砂山を越え、その裏へあっという間に姿を隠した。

また今日、皆は薪を取りに砂丘に行ったが、そのとき山猫を捕まえて帰って来た。それは一見普通の猫にも見えたが、よく見ると顔が横に広く、耳が大きく野獣で獰猛そのもの。私たちはちょっと飼ってみようかと軍手をつけて3人がかりで押さえつけ、荷造り用のビニールの綱で体を縛っておいた。私たちが棒で突っついてからかおうものなら、ものすごい剣幕で「ウオー」と唸り、歯をむいて飛びかかってきた。綱で縛っていたので事なきを得たがその形相たるも

のペットの猫とは比べ物にならない獰猛さ。羊の生肉を与えようとするとその瞬間、肉に手をかけ猛烈な勢いで引き裂いてかじった。

（しかし次の朝、山猫は太いビニールの綱を食いちぎって逃げて、もぬけの空だった）

私は今日、砂漠の花をスケッチした。砂漠の花は、ひっそりと目立たなく、小さく咲いている。よく見るといたるところに砂にへばりつくように咲いていた。顔を近づけてみるとかすかな香りを放っている。ちなみに2、3枚の葉の小さい草を引き抜いてみると20cmほども長い根が伸びていた。さらに茎には細かい棘がついている。砂漠の草花はたくましい。

（注；ルブ・アルハーリーの現調をはじめとしてそれ以後のアシールの現調の合間に描いた草花のスケッチをこの日記の後に、今は黄色に変色しまった当時のスケッチブックからとって載せさせていただきます。）

1975年12月16日

サブキャンプ。ルブ・アルハーリーの最後の現調。今日で10日目になる。砂の山をいくつ越えてきただろうか。シュッガやウルクと呼ばれる砂漠の谷と山も、数え切れないほどそれらの地名を収集した。

今日行ったところは、イエメンとの国境近く。国境付近はいまだ治安が悪く、山賊がでるという。それはダハーム族によるものであるらしい。私たちはガイドを頼りにダハーム族の遭遇しないよう彼らのテリトリーを避けながら、慎重に現調を進めた。やり残した所はあったが、身の安全のためあえて深入りしないことにした。

実は、私は桑形さん（地質調査所からサウジの石油省に出向されていた技師。日本人として初めて、サウジ人のパーティーと舗装道路建設のために測量のためにルブ・アルハーリーに入られた方）に今回サウジに来る前にお会いしてルブ・アルハーリーに入る際の注意すべき点などのアドバイスを受けていた。

桑形さんによると特に注意すべきことは、サウジとイエメンの国境付近は政府の統治の目が届かない地域があり、そこではいまだに山賊が出没することがあるということであった。現に桑形さんの率いるパーティーも山賊に遭遇したことがあるという。それは次のような話である。あるとき測量作業していたら突然砂丘の稜線に数台の赤いピックアップ車が音もなく姿を現し、鉄砲を鳴らして桑形さんのパーティーを威嚇したという。それから1台の車が近づいてきて、次のような条件をだしたという。「車を何台か置いていくか、あるいは金（ドル）を置いていくか、どちらかを選べ」この山賊は要求に従えば、命まではふつ

う狙わないということを聞いて知っていたので、桑形さんは車を持っていかれる方が死ぬと同じことなので、お金の方を支払ったという。

今回、私たちのパーティーが一度も山賊に会わなかったことは幸運というほかない。特に山村さんとルゼイクを砂漠の真ん中に 1 週間も留守番として残したことを今から考えると、すごく危険なことだったのではないかと背筋が寒くなった。2 人が無事で何事もなかったことは奇跡に近い。

1975年12月17日

サブキャンプ最終日。昨日に引き続き、桑形さんのやられた舗装道路予定コースを辿った。そのコースには鉄の棒が立ててあり、黒い原油を撒いた四角のコンクリートの標識がところどころに埋めてあった。我々はそれを探しながら進んだ。しかしその予定コースはほぼ直線的に西に延びており、私たちは数多くのウルーク（砂山）を越えていかなければならなかった。私は 50 万分の 1 の地図をたよりに地図上に越えていった砂山に印を付け、通った道を見つけていった。しかしとにかく単調な砂山群に現在位置を失うことしばしばだった。地名に関しては、井戸のあるようなところ（中に 2 つあった）の近くではたくさんの地名があったが、遠くなるに従って地名も少なくなった。ナジュランから連れて行ったガイドも遠くなると地名を知らず、さっぱり役立たずになってしまった。しかし今日は幸運にもシュッガの中に放牧されているラクダを見つけた。ラクダにはかならず持ち主が近くにいる。私たちはその辺りを探し回ったら、案の定ベドウィンのテントを見つけることができた。私たちはその主人からたくさんの地名を聞きだした。彼はヤーミー族で、イエメンの方まで知っていたので、私たちが今回入ることができなかった国境付近の地域の名称をも確認することができ、一気にノルマのシートを完了することができた。

1975年12月18日

ようやくナジュランのベースキャンプに帰った。

車はナジュラン川に沿って雲のような埃を舞い上げ、猛烈なスピードでベースキャンプに向かって走った。今日ばかりは、私は「スピードを出しすぎるな」とドライバーを制止しなかった。いち早く懐かしいベースキャンプに帰りたい。

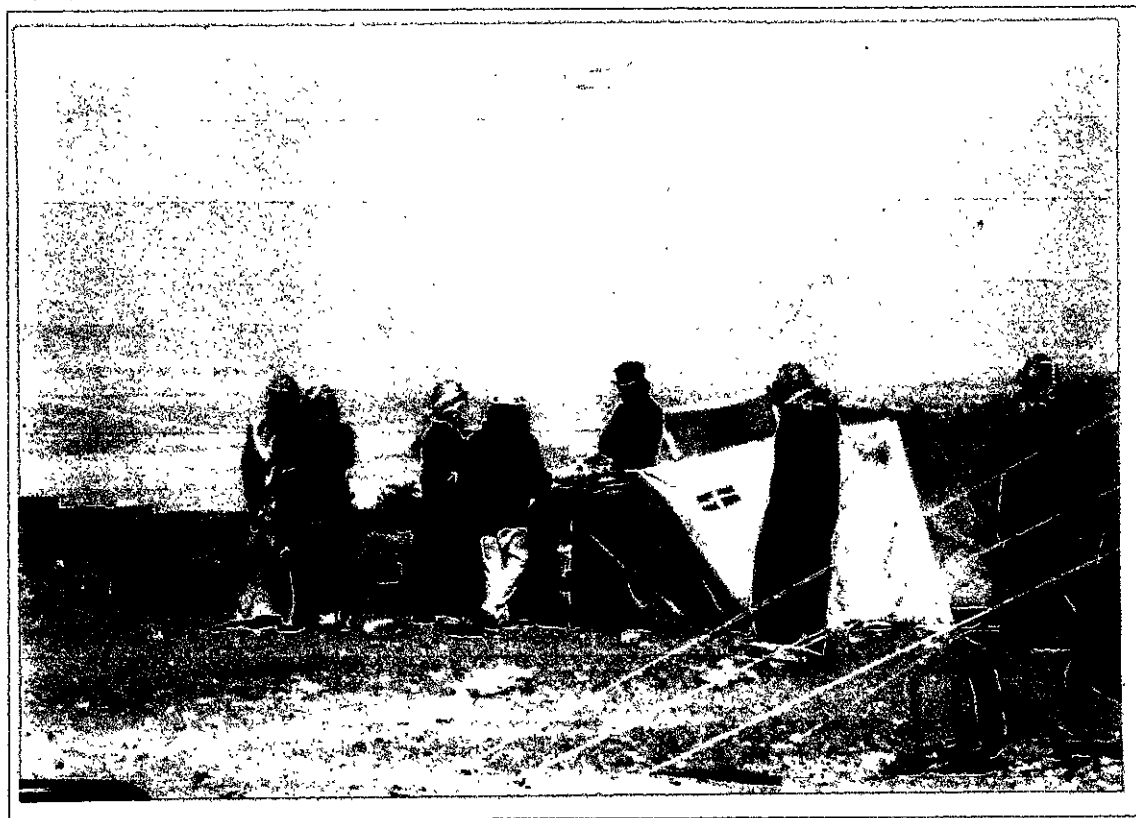
キャンプに到着したのは午後 3 時頃。

皆テントから出て、私たちを出迎え、握手して帰還を喜んでくれた。

これで 12 日間のルブ・アルハーリーの現調も無事終了。

私のかばんの中には今、たくさんのウルークやシュッガの名前を録音したテープが入っている。これが汗を流して苦労した成果だ。これから整理して、岩松氏と地図に盛り込むのが楽しみだ。

(写真1：1日目の野宿)





(写真2 ; モンホリー付近にあった道路建設のための標識)



(写真3 : サブキャンプにて)



(写真4；シャローラのアミールのテントにて)

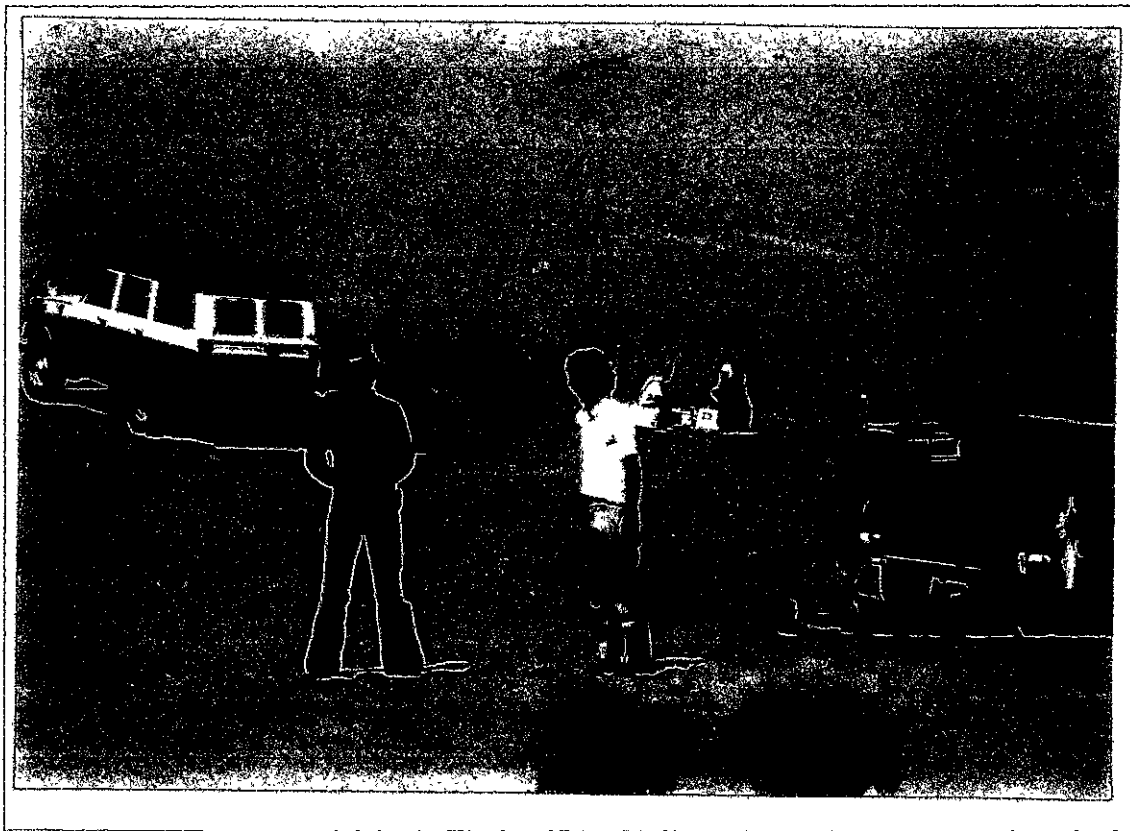


(写真5；シャローラ地域の美しい砂丘で)



(写真6 ; シャローラ地域の現調、先導するアミールの車)

(写真7 ; シャローラ地域の現調、岩松氏と。右はアミールの車。脇に羊が解体されて、吊るさがっている。昼食用。)





(写真8 ; キャンプに帰って、右から祖父江氏<メカニック>、岩松氏、ルゼイク、オマル氏、大脇氏、本田)



(写真9 ; 右から山村氏、アッバース、岩松氏、オマル氏、本田、ルゼイク)